

暑い夏が過ぎ去って曼殊沙華(彼岸花)が咲き、稲穂が色づく頃になると思い出すことがある。それは昭和53年(1978年)8月24日から10月4日までの約40日間、京都府綾部市にある機械メーカー(日東精工綾部工場)に長期出張したことである。

当群馬製作所では、前年「ふとん乾燥機」という業界初の画期的な商品を開発し発売したところ予想を越えるヒット商品となり飛ぶように売れた。

ところが、ふとん乾燥機はアイデア商品とも言われ構造がシンプルなためライバルメーカーは勿論、中小メーカー等の模造品の追従もすごく早かった。そこで、先行開発メーカーとしてなんとしても勝ち抜くため、一刻も早く量産体制(量産設備の導入)を確立して、コストダウンを図ることが喫緊の最重要課題となった。

そこで量産設備は、長年の付き合いのある京都の機械メーカー(日東精工・京都府綾部市在)に発注されることになったのである。ところが、メーカー側も受注が立て込んでいるとかで、日程調整に手間取りこちら側の希望する納期が、後ろにずれこむ恐れが多分にあった。そこで、機械メーカーの戦力アップの一助として我が社として何らかの応援と進捗状況のフォローアップが必要だということになったのである。

上層部の議論の結果、設備発注元の製造管理部をはじめとして、工作部など各関連部門でチームを編成し40日間という長い期間出張することになった。

現地(機械メーカー)では、毎日量産設備の進捗状況をチェックし、予定された工程に遅れがあれば、深夜までメーカーへの援助作業を継続し、工程を消化することに努めることだったのである。

機械メーカーの所在地である綾部市は、京都府の丹後地方にあり、手前が福知山市でその先は戦後の引き上げ船で有名な舞鶴市である。国鉄山陰線は非電化線であり京都駅から気動車に揺られて2時間余りの距離にある。尾島の工場を、12時40分に出発してここ綾部の駅に着いたのが20時55分で陽はとっくに暮れていた。

綾部駅を降りたって驚いたのは、商店や医院などの看板のあちこちが大槻姓だったことである。翌日、機械メーカーに本社したら名が自分と一文字しか違わない大槻さんがいたのである。自分としては先祖の地に来たようで魔訶不思議な気持ちになった。

後に歴史書で調べたら、この町は昔城下町だったそうで、ここの石原城々主が大槻姓を名乗っていたために大槻姓が多いと記してあった。また、この町は、過去に「大本教」という新興宗教の起こったところとしても有名だったようだ。

この綾部市のある丹後地方の特産品は「丹後ちりめん(縮緬)」が有名で、お土産物などに加工したものが売られていた。仕事が完了して引き揚げるときに、妻に丹後ちりめんのできたバッグをお土産として買った。

綾部（機械メーカー）に来てから毎日の仕事は深夜に及び、進捗状況は捗々しくなく難儀の連続だった。そこで、ホッと一息つけるのは宿の夕食くらいだったろう（夕食を宿に食べに帰って再度出社）。こんな厳しい状況下ではあったが忙中閑ありで、たまには工場を抜け出して近くの田圃に出かけられることもあった。この辺は、市といっても市街を一寸外れると、とたん凄いい田舎風景となり、見渡す限りの稲田と山と川のある風景だった。機械メーカーの従業員の話では、近くの山で、松茸がよく採れるようなことも何度か聞いた。さらに驚いたことに、工場周辺の川ではヘビが泳ぐ姿が時々見られ自然がすごく豊かなところとだと思った。こんな中で暫く居ると心がリフレッシュされ気分が爽快になった。

ときは9月下旬、田圃の畔では曼寿紗華の花が満開で、青い空と白い雲そして黄色に染り頭をたれる稲田の風景が心に焼き付いている。

休日に、綾部に来た記念として市民の憩いの場である小高い山に登ったところ、山頂に記録帳が置いてあったので、群馬の太田から来たことを一言記し大槻とサインしてきた。また、仲間と股覗きで有名な天橋立や福知山市の福知山城址の観光にも出かけた。

その後、福知山の映画館でスターウォーズを見たり、パチンコ店に繰り出したこともあった。こんなことが長期間の出張の忙中閑ありで、心の洗濯にもなった。

40日間泊まった旅館を引き上げるときは宿の女将さんから楊枝入れの焼き物を記念品としていただいたが、現在でもサイドボードの中にポツンと鎮座している。

[2019年9月20日 記]

※本稿の関連として、篠崎辰夫さんが2007年12月に「ふとん乾燥機の誕生秘話」として投稿しています。

■写真・京都丹後地方の思い出の風景 三菱電機健保便りの表紙に載ったが、懐かしい風景なの保存しておいたものをコピーさせてもらった。

